付……❷

草戸千軒

鈴木康之

はじめに

草戸千軒町遺跡は，広島県福山市草戸町の芦田川中州に所在する中世の集落遺跡である。遺跡の発見は1930年前後にまでさかのぼり，芦田川の河川改修工事中に多量の遺物が出土したことによって，その存在が明らかになった。遺跡の中心部分が川の中州として孤立したのも，この1920年代から30年代にかけての河川改修工事によって，芦田川の流路が付け替えられたことに原因がある。この遺跡に対する学術的な発掘調査が開始されたのは1961年のことで，村上正名氏らの積極的な運動によって，福山市教育委員会による調査が実施された。この発掘調査によって，芦田川中州に存在する遺跡の存在と重要性が認識され，1968年からは広島県教育委員会に調査主体が移ることになった。さらに，広島県教育委員会は1973年に文化課分室として草戸千軒町遺跡調査所を設置し，1976年には草戸千軒町遺跡調査研究所に名称変更し，独立した地方機関となった。

30年以上におよぶ発掘調査の成果は，5分冊から成る発掘調査報告にまとめられている〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1993～1996〕。その内容は多岐にわたるため，ここで簡潔に要約することは困難だが，重要な成果の一つとして挙げなければならないのは，この集落が手工業・商業・金融業などに深く関与し，芦田川流域，あるいは福山湾岸の地域経済に重要な役割を果たしていたことが明らかになった点である。こうした集落の性格が，中世社会に対する従来の認識をさまざまな角度から改めさせるきっかけとなったことは，多くの研究者によって指摘されているところである。

ここでの目的は，草戸千軒町遺跡から出土している食器類のうち，整理・研究が比較的進んできた土器類の概略をまとめることによって，この集落における食器使用の特質の一端を描き出すことである。中でも，土師器食膳具[1]は最も多く出土する遺物で，集落の変遷に関わるさまざまな問題を検討する上でも重要な手掛かりを提供しているため，土師器食膳具をめぐる問題を中心に考察を加えたい。

1　草戸千軒町遺跡における食器の概略

中心的な課題である土師器食膳具の考察に入る前に，ここでの時期区分と，草戸千軒町遺跡における食器類全体の状況について説明しておく。

（1）時期区分

草戸千軒町遺跡では，最も普遍的に出土している土師器食膳具の型式編年を基準に，遺構・遺物の年代を決定している。これらの土器の変遷については発掘調査報告に詳しくまとめているが，基本的には土器の器種組成によってⅠ期からⅣ期までの4時期を設定し，さらに椀や皿の寸法規格の

表1 草戸千軒町遺跡の時期区分

草戸千軒の時期区分	歴年代	ここでの時期区分
Ⅰ期前半	13世紀中葉から後半	中世Ⅱ期
Ⅰ期後半	13世紀後半から14世紀初頭	
Ⅱ期前半	14世紀前半	中世Ⅲ期
Ⅱ期後半	14世紀中葉	
Ⅲ期	15世紀前半	中世Ⅳ期
Ⅳ期前半	15世紀後半	中世Ⅴ期
Ⅳ期後半	15世紀末から16世紀初頭	

変化によって，細かな段階を設定したものである。各段階に比定している暦年代は，表1のとおりである。暦年代は，瓦器椀などのある程度年代が明らかになっている共伴遺物や，紀年銘資料などをもとに割り出し，一部分は年輪年代法によっても検証している。

ここでは他地域の遺跡との比較・検討の便を考慮して，基本的には中世Ⅱ期から中世Ⅳ期にわたる時期区分を用いている。しかし，画期の年代は草戸千軒町遺跡の土器編年に従っており，草戸Ⅰ期を中世Ⅱ期（13世紀中葉から14世紀初頭）に，草戸Ⅱ期を中世Ⅲ期（14世紀前半から14世紀中葉）に，草戸Ⅲ期を中世Ⅳ期（15世紀前半）に，草戸Ⅳ期を中世Ⅴ期（15世紀後半から16世紀初頭）に対応させている（表1）。また，暦年代を用いた方が時期が明示できると思われる箇所では，西暦による暦年代も使用している。

（2）食器の種類

この遺跡から出土した食生活に関連する器を材質別に見ると，大きくは，土器類，石製品，金属製品，木製品，繊維製品などに分けることができる。また，これを機能別に見れば，食膳具，煮炊具，調理具，貯蔵具などに分かれる。ここでは，機能別にどのような材質の器が出土しているかを挙げながら，当遺跡での使用状況を示しておきたい（表2）。

［食膳具］

食膳具の大部分を占めるのは，土師器の椀・皿類である。しかし，後述するように，これら土師器食膳具の中心的な用途が，日常的な食事の容器であったとは考えにくい。その他の国産の土器・陶器としては，瓦器の椀・皿，備前の椀，瀬戸の椀・皿なども出土しているが，出土量はそれほど多くない。輸入陶磁器では，中国・朝鮮・ベトナム産の製品が確認できているが，大部分は中国産だと考えられる。輸入陶磁器の出土比率は，重量にして土器類全体の1％に満たない程度であるが，その中では青磁椀が最も多く，とくに龍泉窯系の蓮弁文椀は，輸入陶磁器の破片数の20％あまりを占めている[(2)]。

木製の食膳具としては，漆器の椀・皿，白木の折敷・箸・杓子などがある。漆器は全期間にわたってある程度の出土量を確保しており，日常的な食事容器の中心的な役割を果たしていたものと判断できる〔下津間1991〕。ただ，箸に関しては遺構内に一括廃棄される例が多く，日常的な食事とは別の用途で使われた可能性もある。また，曲物などの木製容器の中にも，食膳具として使われたも

表2　草戸千軒町遺跡における主要器種の消長

種　類	器　種	中世Ⅱ期		中世Ⅲ期		中世Ⅳ期	中世Ⅴ期	
		Ⅰ期前半	Ⅰ期後半	Ⅱ期前半	Ⅱ期後半	Ⅲ期	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半
土師器	椀B	―	―	―	―			
	椀A			―	―			
	椀C				―	―		
	杯A	―	―	―	―	―		
	Ⅲ A	―	―	―	―			
	Ⅲ A Ⅰ					―	―	―
	Ⅲ A Ⅱ					―		―
	Ⅲ A Ⅲ						―	―
	Ⅲ A Ⅳ							―
	鍋B	―	―	―	―	―	―	
	鍋C	―	―	―	―			
	盤	―	―	―				
瓦器	椀・Ⅲ	―	―	―				
	輪花火鉢		―	―	―			
	風炉				―	―	―	
	小型火鉢							―
	灯籠						―	―
瓦質土器	鍋B（亀山系）							―
	鍋D（亀山系）							―
	鍋E（亀山系）						―	―
	鍋C（畿内系）			―	―	―		
	鍋F（安芸系）				―	―	―	
	釜B（亀山系）						―	―
	擂鉢（亀山系）	―				―		
備前	壺・甕	―			―	―	―	―
	擂鉢		―		―	―	―	―
亀山	壺・甕	―	―	―	―	―	―	―
東播系須恵器	壺・甕	―		―				
	擂鉢	―	―	―	―			
常滑	壺・甕	―				―		
	擂鉢		―					
石鍋		―	―	―	―	―		
石臼					―		―	―
鉄鍋			―	―	―	―	―	―
漆器椀・Ⅲ		―	―	―	―	―	―	―
結桶・結樽					―	―	―	―

のが含まれている可能性がある。

木製食膳具に関連して指摘しなければならないことは，白木の器は全くと言っていいほど出土していないことである。これは漆器に比べて保存状況が悪いことに原因があるとは思われない。当遺跡では，前述の折敷や箸をはじめ，数多くの白木の木製品が良好な状態で出土しているが，その中に白木の椀・皿はほとんど含まれていないからである。したがって，それらが食器として日常的に使用されていたことは否定せざるを得ない。

金属製の食器としては，御食器・六器台などの宗教用具が出土しているが，日常的な食器とは言い難い。

[煮炊具]

煮炊具の中心を占めるのは土師器鍋で，土師器食膳具に次ぐ量が出土している。大部分の資料の外面に煤や炭化物が厚く付着しており，飲食物の煮炊に使用されていたことが確認できる。このほか，瓦質土器の鍋も出土しているが，土師器鍋に比較すると出土量は少なく，一部には他地域からの搬入品と考えられるものも含まれている。移動式の竈は，13世紀から14世紀代にかけて数多く確認できる。造り付けの竈も存在していたものと思われるが，明確な遺構は確認できていない。遺構内から出土する焼土塊のうち，壁土とは考えられないものについては造り付けの竈の断片である可能性も考えられるが，十分に検討されてはいない。

土器の鍋に次いで多いのは滑石製の石鍋で，13世紀から14世紀代の遺構で多く出土し，時期的な変遷も明らかになっている〔木戸1982〕。しかし，15世紀以降は出土量が少なくなり，変遷の動向がつかみにくくなる。また，破損した石鍋を温石・硯・漁網錘などに転用する例も多い。

金属製の煮炊具としては鉄鍋が出土しているが，全般的な出土量はきわめて少ない。しかし，再製利用の問題もあり，この集落での使用量が必ずしも低かったとは判断できない。

[調理具]

調理のための容器としては，擂鉢が数多く出土している。時期的な消長があるものの，出土量としては魚住窯を中心とする東播系須恵器の製品が最も多い。それに次ぐのは亀山系瓦質土器(3)の擂鉢で，備前の擂鉢は出土量としては目立って多いわけではない。ただし，備前の擂鉢は耐久性が高く，長期間にわたって使用されたことが考えられるため，遺構からの出土量がそのまま使用された製品の比率を反映しているかどうかは疑問である。また，13世紀末から14世紀前半にかけての時期には，常滑の擂鉢や，東海の山茶碗窯の擂鉢も出土している。

石臼は，14世紀中葉の遺構から出土した例が最も古いものとなっているが，一定量が確認できるようになるのは，15世紀後半になってからである。

[貯蔵具]

貯蔵容器としては，国産陶器の壷・甕の出土量が圧倒的に多い。産地別には常滑・備前・亀山の三者が大部分を占める。少量ではあるが東播系須恵器の壷・甕も見られる。また，埋甕遺構も確認されている。

木製貯蔵容器として最も目立っているのは，大小の曲物容器である。全期間を通じて出土しており，広範に利用されていたことがわかる。また，曲物に代わって中世後半期に普及すると言われる結桶・結樽は，13世紀末の資料が最も古い例となるが，一定量が確認できるのは14世紀中葉以降で

ある〔鈴木1995 b〕。そして，15世紀から16世紀にかけては，曲物とほぼ同じ量が出土するようになる。井戸に利用されている結桶[4]では14世紀中葉の例が最も古く，15世紀代になると資料数が増加する。丸太材を刳り抜いた刳桶も，井戸材に転用されたものが13世紀後半から14世紀前半にかけての時期に集中して確認できる[5]。

（3）土器類の変遷

以上に概略を述べてきたような食生活に関連する容器の中で，出土量が多く，時期的な変遷が明らかになっているのは土器類である。そこで，時期判定の基準としても利用されている土師器食膳具を中心に，土器類の時期的な変遷を概観しておく。

［食膳具］（図1）

中世Ⅱ期：土師器としては椀B（高台付きの椀）・杯A（平底の杯）・皿A（平底の小皿）がある。時期とともに寸法が小型化し，つくりは簡略なものになる傾向がある。その変化がとくに顕著なものが椀Bである。

中世Ⅲ期：椀B・杯A・皿Aに加えて，椀A（無高台の椀）が出土するようになる。椀Aは出現当初にはそれほど量は多くないが，時期が降るにつれ出土量は増加し，椀Bを凌ぐようになる。また，出土量は少ないが，底部中央を大きくくぼませた椀Cもこの段階に確認できる。

中世Ⅳ期：この段階には，新たな寸法規格の皿AⅠ・皿AⅡが出現する。前段階までの椀・杯・皿はほとんど消滅し，器種組成は大きく変化する。前段階までを椀中心の器種組成とするならば，この段階以降は皿中心の器種組成と言うことができる。

中世Ⅴ期：前段階には2種類だった皿の寸法規格が4種類に増え，皿AⅠ・皿AⅡ・皿AⅢ・皿AⅣが出揃う。皿の口径・器高は時期とともに縮小し，次第に扁平な形態へと変化している。

［煮炊具］（図2）

中世Ⅱ期：土師器の鍋B（口縁部が直線的に延びるもの）・鍋C（受け口状に内湾するもの）が存在している。これらに三足を付けた鍋も出土しているが，体部の形態・調整手法などは足の付かないものと全く同じである。

中世Ⅲ期：土師器の鍋B・Cが中心を占めているが，足の付くものは少なくなってくる。また瓦質土器の鍋として，口縁部の外側に突帯を巡らせた鍋Fが出土するようになる。この形態の鍋は，広島県の安芸地方に分布の中心があり，安芸地域からもたらされた可能性がある。その他に，畿内産と考えられる瓦質の鍋も出土している。

中世Ⅳ期：土師器鍋では鍋Cの出土量が減少し，ほとんどが鍋Bによって占められるようになる。また，鍋Bの形態も前段階までとは若干異なっており，口縁部を幅広く成形するものが出土するようになる。瓦質土器の鍋Fも少量ながら出土が確認できる。

中世Ⅴ期：この段階の前半では，前段階と同様に幅広い口縁部をもつ土師器鍋Bが出土しているが，後半になると土師器鍋はほとんど出土しなくなる。それに代わって出土量を増加させるのが，亀山系瓦質土器である。亀山系瓦質土器の煮炊具には鍋・釜などがあるが，最も多いのは鍋Bで，その他に口縁部内側に一対の耳をもつ鍋Dや，行平鍋のように把手を付けた鍋E，体部に鍔の巡る釜Bも出土している。

図1　草戸千軒町遺跡(1)

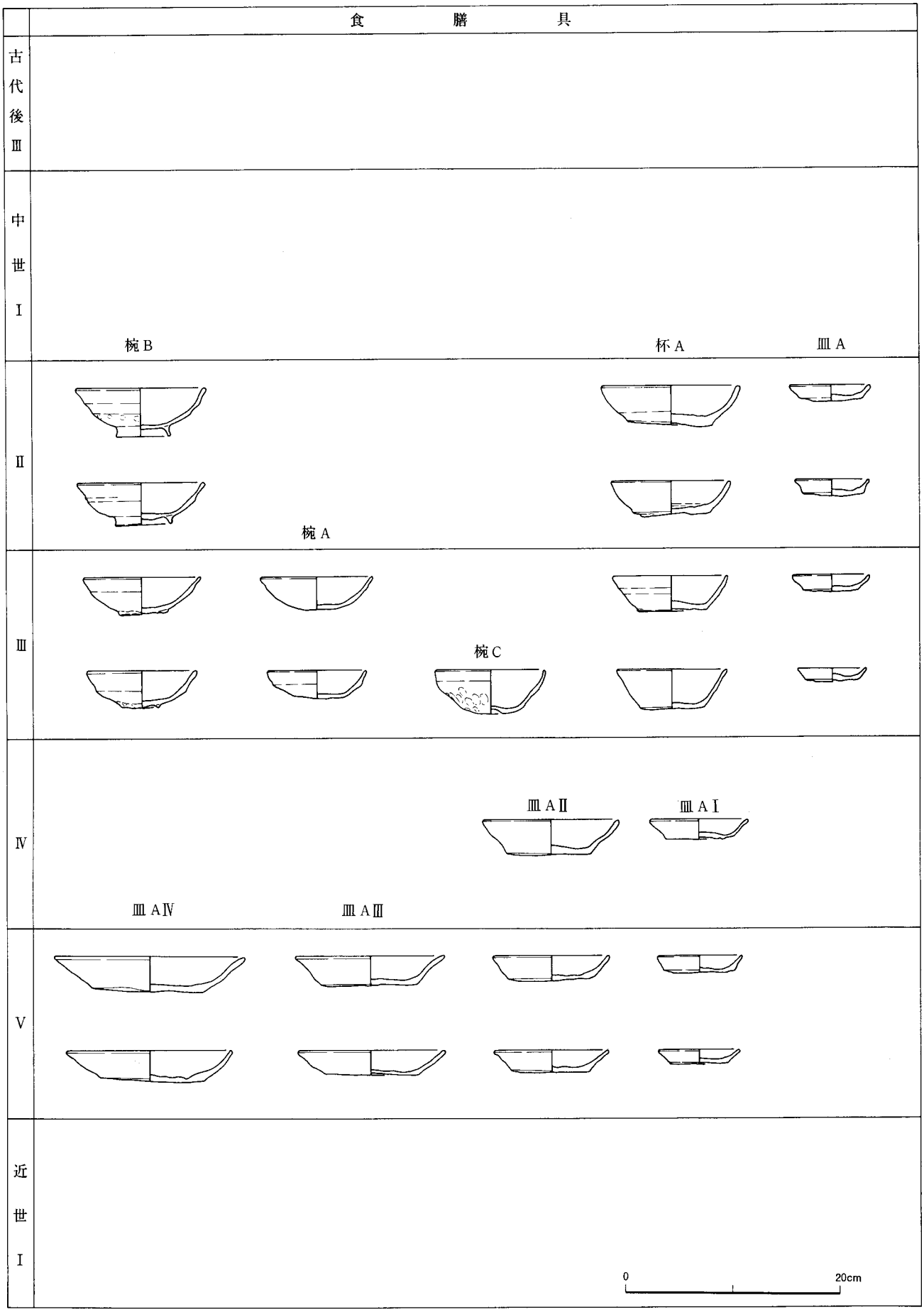
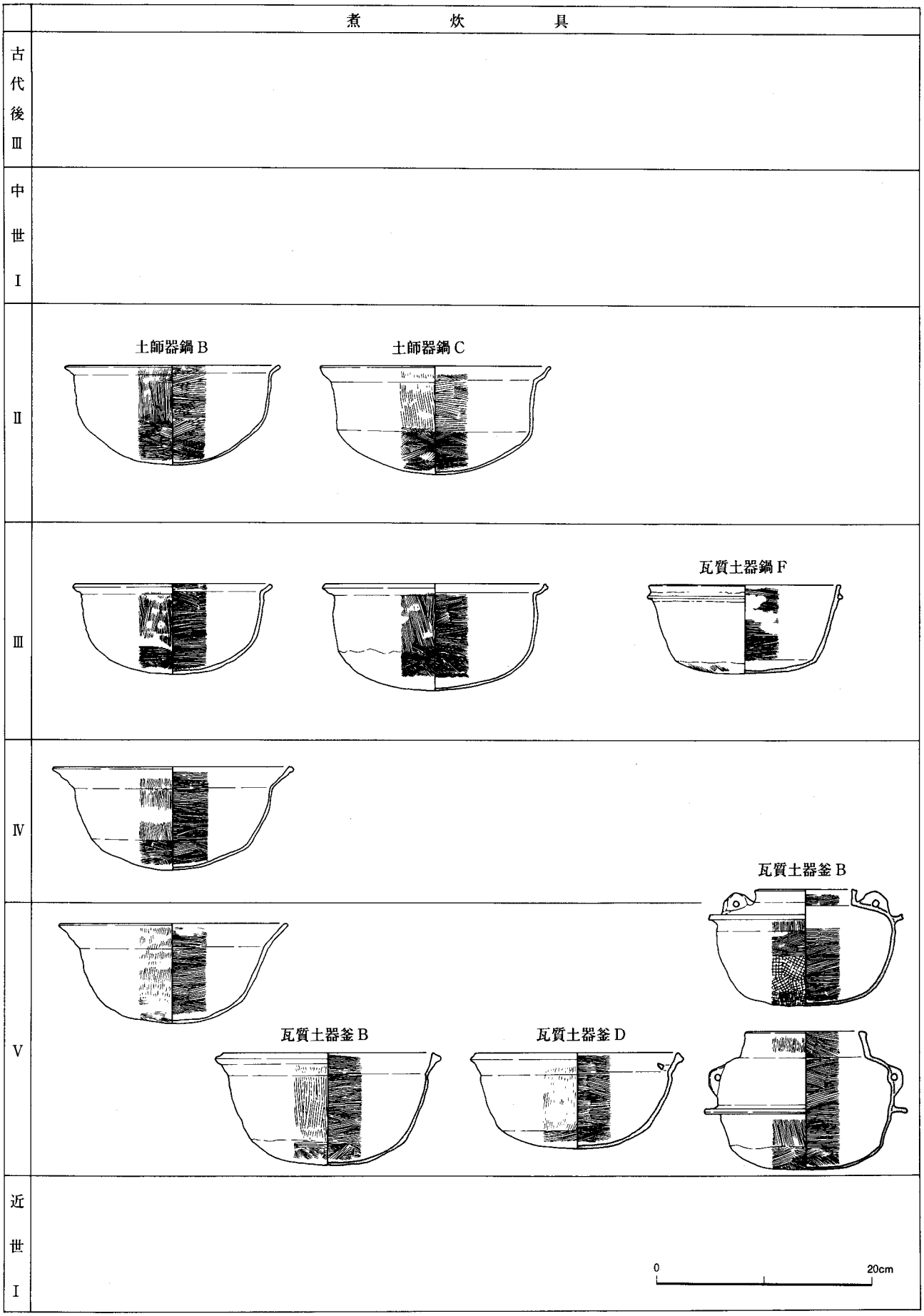


図2　草戸千軒町遺跡(2)


煮　炊　具
古代後Ⅲ
中世Ⅰ
Ⅱ
土師器鍋B
土師器鍋C
Ⅲ
瓦質土器鍋F
Ⅳ
瓦質土器釜B
Ⅴ
瓦質土器釜B
瓦質土器釜D
近世Ⅰ
0
20cm

[調理具]

中世Ⅱ期：擂鉢の大部分は，東播系須恵器の擂鉢によって占められている。また，亀山や常滑の擂鉢も少量確認できる。

中世Ⅲ期：この段階の前半になると東播系須恵器の擂鉢の出土量はやや減少し，備前の備前の擂鉢が一定量出土するようになる。また，常滑や東海地方の山茶碗窯産の擂鉢も目立つようになる。しかし，後半になると備前の擂鉢の比率が急速に増加し，擂鉢の大部分は備前によって占められるまでになる。

中世Ⅳ期：前段階に急速に出土量を増やした備前の擂鉢は，この段階にも引き続き出土しているが，それ以上に目立つようになるのが亀山系瓦質土器の擂鉢である。この段階の多くの遺構では，備前を凌ぐ量が出土している。また，東播系須恵器の擂鉢は，ほとんど出土しなくなる。

中世Ⅴ期：擂鉢の大部分は亀山系瓦質土器によって占められるようになる。備前の擂鉢も一定量は確認できるが，亀山系瓦質土器には及ばない。また，亀山系瓦質土器とは異なる特徴をもつ瓦質擂鉢も確認できる。この擂鉢は，灰色の須恵質に近い焼成で，やや厚手に作られたものである。草戸千軒町遺跡での出土量はそれほど多いものではないが，尾道遺跡〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1979ほか〕や沼田市遺跡〔広島県立歴史博物館1993ほか〕，あるいは見近島城跡〔愛媛県埋蔵文化財調査センター1983〕などではまとまった量が確認できることから，備後西南部から安芸，さらに芸予諸島にかけての地域に中心的な分布域があるものと思われる。

[貯蔵具]

中世Ⅱ期：常滑[6]と備前の壷甕類が，ほぼ同じ比率で出土している。亀山の比率はそれほど多くはないが，ほとんどの遺構で出土が確認でき，時期とともに比率を高めている。

中世Ⅲ期：この段階の前半までは亀山の出土量が次第に増加し，備前・常滑に匹敵するまでに至る。しかし擂鉢の場合と同様に，後半段階に入ると備前の比率が急激に高くなり，それに追われるように亀山・常滑の比率は低下してくる。

中世Ⅳ期：前段階後半の状況は，この段階でも引き続き確認できる。常滑の出土量はこの段階にも引き続き減少している。

中世Ⅴ期：備前が，壷甕類の大部分を占めるようになる。常滑の破片も若干確認できるが，型式的に新しいものが確認できないことから，当遺跡への常滑の搬入は，この段階にはほとんど途絶えていたものと判断できる。

2 土師器食膳具の用途

既に述べてきているように，草戸千軒町遺跡の土器・陶磁器類の中で，最も多く出土しているのは土師器食膳具である。この土器は，その形態や出土量の多さから。日常的な食事の容器と考えられる傾向が強かった。しかし，筆者は次に示すようないくつかの観点から，日常的な食膳具とは異なる機能・用途をもっていたと考えてきた〔鈴木1989a・1989b・1993〕。ここでは，これまでに発表してきた論点をまとめるとともに，最近の研究成果をまじえながら，土師器食膳具の用途について考えてみたい。

（1）出土比率

土師器食膳具の用途を考える手掛かりとして，まずそれらの出土比率を確認しておきたい。本来ならば，すべての材質の資料の中に占める比率を考えるべきであろうが，そこまでの資料整理が完了していないため，ここでは土器類全体の中に占める比率を提示しておく。

表3は，当遺跡の各段階を代表する遺構から出土した土器類の重量比をまとめたものである。ここに示されているように，土師器の食膳具，つまり表中に「土師器　椀Ⅲ」としたものが，いずれの遺構でも最も多く出土している。さらに細かく見ていくと，中世Ⅱ期からⅢ期にかけての段階では，6～9割程度という圧倒的多数を占めているのに対して，中世Ⅳ期からⅤ期にかけては4～6割程度と比率が低下していることも確認できる。

このように，中世前半（中世Ⅱ・Ⅲ期）と後半（中世Ⅳ・Ⅴ期）とでは具体的な比率に差はあるものの，他の種類の土器類をはるかに凌ぐ量の土師器食膳具が埋められていることは明らかである。土師器食膳具に次いで出土量の多い土師器鍋と比較してもその出土比率の差はかなり大きく，土師器食膳具の消費量が際だって多かったことに注目しておきたい。

（2）使用の痕跡

さて，次に土器に残された使用痕を検討する。将来，脂肪酸分析などの理科学的方法によって，器にどのような物質が盛られていたかを明らかにできれば，土師器食膳具の用途が直接的に解明できる可能性もある。しかし，現在までのところ当遺跡ではこの方面からの分析結果は得られていない。そこで，肉眼観察によって確認できる使用痕について考えてみたい。

肉眼観察によって確認できる使用痕としては，口縁部を中心にタール状の付着物が認められる資料を挙げることができる。灯心の痕跡がはっきりと認められるものもあることから，これらが灯明皿として使われていたことは間違いないだろう。この痕跡は皿だけでなく，椀や杯でも同様に確認できる。表4は，いくつかの遺構から出土した土師器食膳具に残るタール状付着物の痕跡の比率をまとめたものである。遺構内にまとめて埋められた土師器食膳具の中の，おおむね1割以上には，こうした痕跡が認められることになる。ただし，これは肉眼でタール状の物質の付着が確認できた例であり，実際にはより多くの個体が灯明皿として使われていた可能性もある。

また，内面に漆が付着した土師器椀も数点出土している。漆工用の砥石が漆とともに付着した例もあることから，これらは漆器製作の過程で使われたものと考えられる。この他に，墨書の記された土器，あるいは焼成後に穿孔された土器なども少量確認できている。しかし，これらが資料全体の中に占める割合はごくわずかなもので，土師器供膳具の本来の用途に結びつく痕跡とは言い難い。

肉眼で確認できる痕跡としては以上のような例を挙げることができるが，全般的に見ると，明確な使用の痕跡が確認できない資料が目立つ。たとえば，高台付きの椀は焼成前に重ねて乾燥されたらしく，内底面に重ねた高台の先端部がいわゆるバリのような状態で付着している例が多い。そして，ほとんどの資料には，これがきれいに残っている。つまり，内面を繰り返し摩擦するほどには使い込まれていないと考えられる。また，遺構から大量出土する土師器供膳具の多くは完形品に近い状態で出土しており，これらが使用の結果破損したものではないことが示されている。灯明皿としての痕跡が確認できる例でも，完形の状態で出土するものが圧倒的に多いことから，使用の結果壊れた灯明皿を廃棄したとも考えられない。

表3　土器・陶磁器の出土比率

製品名	SD1290(中世Ⅱ前半)		SD2022(中世Ⅱ後半)		SD3190(中世Ⅲ前半)		SK1300(中世Ⅲ後半)	
	重量(kg)	比率(%)	重量(kg)	比率(%)	重量(kg)	比率(%)	重量(kg)	比率(%)
土師器　椀皿	70.09	70.1	255.30	63.3	365.90	79.2	1257.91	89.3
土師器　鍋釜	8.62	8.6	32.14	9.0	17.52	3.8	45.82	3.3
土師器　竈	1.26	1.3	30.88	8.7	6.56	1.4	1.92	0.1
備前　壺甕	8.60	8.6	18.02	5.1	12.78	2.8	61.88	4.4
備前　擂鉢	0.04	0.0	0.20	0.1	3.16	0.7	17.86	1.3
常滑　壺甕	7.62	7.6	21.26	6.0	17.66	3.8	15.74	1.1
常滑　擂鉢	0.00	0.0	0.64	0.2	2.30	0.5	0.00	0.0
亀山　壺甕	1.56	1.6	11.20	3.1	14.68	3.2	1.72	0.1
亀山　擂鉢	0.16	0.2	0.84	0.2	0.10	0.0	0.82	0.1
亀山　鍋釜	0.00	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0
東播系　壺甕	0.36	0.4	0.88	0.2	0.12	0.0	0.14	0.0
東播系　擂鉢	1.00	1.0	10.58	3.0	7.56	1.6	2.00	0.1
瓦器　火鉢類	0.00	0.0	0.14	0.0	11.98	2.6	2.08	0.1
瀬戸	0.02	0.0	0.00	0.0	0.08	0.0	0.06	0.0
輸入陶磁器	0.58	0.6	3.06	0.9	1.40	0.3	0.62	0.0
その他	0.08	0.1	0.54	0.2	0.30	0.1	0.24	0.0
合計	99.99	100.0	355.68	100.0	462.10	100.0	1408.81	100.0

製品名	SG2550(中世Ⅳ)		SK1925(中世Ⅴ前半)		SK4730(中世Ⅴ後半)	
	重量(kg)	比率(%)	重量(kg)	比率(%)	重量(kg)	比率(%)
土師器　椀皿	22.26	36.3	47.98	65.2	30.12	41.1
土師器　鍋釜	18.32	29.9	8.98	12.2	3.37	4.6
土師器　竈	0.32	0.5	0.24	0.3	0.28	0.4
備前　壺甕	10.70	17.5	10.52	14.3	18.68	25.5
備前　擂鉢	0.46	0.8	0.88	1.2	2.42	3.3
常滑　壺甕	2.56	4.2	1.40	1.9	1.78	2.4
常滑　擂鉢	0.02	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0
亀山　壺甕	2.78	4.5	0.34	0.5	2.76	3.8
亀山　擂鉢	1.04	1.7	1.14	1.5	4.92	6.7
亀山　鍋釜	0.00	0.0	0.00	0.0	7.38	10.1
東播系　壺甕	0.00	0.0	0.00	0.0	0.00	0.0
東播系　擂鉢	0.38	0.6	0.20	0.3	0.18	0.2
瓦器　火鉢類	2.00	3.3	1.40	1.9	0.68	0.9
瀬戸	0.18	0.3	0.24	0.3	0.02	0.0
輸入陶磁器	0.22	0.4	0.24	0.3	0.62	0.8
その他	0.06	0.1	0.04	0.1	0.00	0.0
合計	61.30	100.0	73.60	100.0	73.21	100.0

表4　土師器食膳具に残る灯心痕の比率

遺構番号	時期	観察個体数	痕跡ある個体	比率(%)
SD1290	中世Ⅱ期前半	348	84	24.1
SG1791	中世Ⅲ期後半	627	61	9.7
SD3190	中世Ⅲ期前半	1306	207	15.8
SK1370	中世Ⅲ期後半	833	93	11.2
SK1300	中世Ⅲ期後半	2915	297	10.2
SD510	中世Ⅴ期前半	650	99	15.2
SD4455	中世Ⅴ期後半	410	147	35.9

このように，使用の痕跡から見る限りでは，遺構内の大量の土師器食膳具は，それほどの使用を経ていない土器，言い換えれば，まだ使うことのできる土器をまとめて埋めたものだと解釈できる。これは，その他の陶磁器の状況とは大きく異なっている。たとえば陶器の擂鉢の場合，ほとんどが破片として出土しているが，内面がかなり磨滅している資料が大部分を占めている。また，土師器や瓦質土器の鍋も，外面に厚く煤が付着する破片がほとんどで，これらの土器類が，一定の使用期間を経た後に廃棄されていることが明らかである。したがって，土師器食膳具に関しては，他の陶磁器とは異なった扱いを受けて遺構内に埋まったことを想定しなければならない。

こうした土器類の扱いの違いを示す一例として，第42次調査で検出したSG4415の例を紹介しておきたい。この遺構は，最下層の灰色粘土層の堆積状況から，長時間水がたまっていた池状遺構と判断されたものであるが，この灰色粘土層の上に礫層が堆積し，礫層中からは炭・灰とともに多量の遺物が出している。陶磁器の多く，たとえば，備前壷・甕・擂鉢，東播系須恵器擂鉢，青白磁水注などはいずれも小さな破片として出土しており，しかも火を受けた痕跡を残すものが多い。さらに，炭化したコメや木片，溶融した銭貨なども含まれていることから，火災にあった施設の廃棄物を処理するために，池が埋め戻されたものと解釈している。注目すべきことは，礫層中から出土した土師器食膳具の大部分は完形品で，しかも火を受けた痕跡が認められないことである。つまり，遺物のほとんどが火事場処理の廃棄物として遺構内に埋められている中で，土師器食膳具だけは，それとは異なる別のルートで遺構内にもたらされた可能性が考えられるのである。

（3）出土状況

次の観点は，土師器食膳具の出土状況である。これらの土器が大量に出土しているのは，土坑・池・溝・井戸といった地中に掘り込まれた遺構で，特定の層位から完形品が集中して出土することが特徴である。たとえば，表3にも示したSK1300という土坑は，重量にして1300kgほどの土師器食膳具が出土しているが，このうちの7割近くは炭・灰を多く含む黒灰色土から出土している。しかも，前述のように大部分は完形品で，破片として出土したものでも形を良く保っているものが多いことから，埋められた時点では完形品だったと考えられる。口径・器高が測定できる完形品は3122点が確認できているが，破片を含めた全体の重量から本来の個体数を推定すると，2万点を超える大量の個体がこの土坑に埋められていたことになる。

そして，この土師器食膳具にほとんど時期差が認められないことにも注目したい。土器の変遷過程については後述するが，土師器食膳具の寸法は，時期とともに小型化することが明らかになっている。図3にはいくつかの遺構から出土した土師器椀の口径寸法の度数分布図を掲げたが，いずれも正規分布に近い分布状況を示している。つまり，それぞれの遺構には一定の寸法規格に基づく製品が埋められているということで，ほとんど同時期に生産された土器だと判断できる。このことと，前述の出土層位が集中する傾向とを考えあわせれば，大量の土器が短期間のうちに廃棄されたことが明らかになってくる。

したがってこれらの土器の堆積は，日常的な食事に使われた食器が集積した結果だとは考えられないのである。つまり，何らかの目的で，大量の土器を一括して遺構に埋めたことになる。

（4）遺構の埋没状況

あまり使われていない大量の土師器食膳具が，短期間のうちに遺構内に埋められたことが想定で

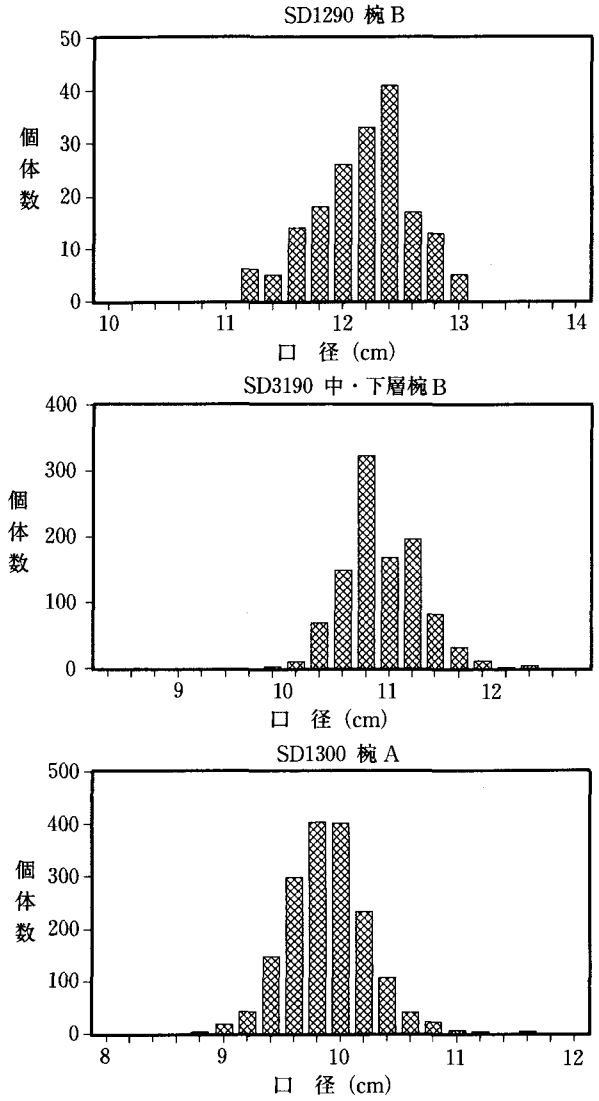


図3　土師器椀の寸法規格

きるようになったが，次に，これらが埋められた遺構の埋没状況から，問題解決の糸口を探ってみたい。

まとまった量の土師器食膳具が出土する遺構としては，土坑・池・溝・井戸などがある。なかでも平面積の大きな土坑や池からは，とりわけ多くの土器が出土している。そして，これらの遺構の埋没状況を検討していくと，そこには共通した傾向のあることが明らかになる。

図4は，典型的な堆積状況を示す遺構の土層図である。これらの遺構に共通しているのは，最下層に粘土層あるいは粘質土層が堆積し，その上に炭・灰を多く含む土層，さらにその上に汚れの少ない砂質土層が何層か堆積することである。また，最下層の粘質土層の上面近くには木製品や木屑などが層を成して堆積している場合が多く，このような木製遺物を多く含む粘質土層を木質層と呼んでいる。そして，土師器食膳具の完形品は，この木質層の上面からその上の炭・灰層にかけて大量に埋められている。その他の土層からも出土してはいるが，量は少なく，破片のものが多い。また，他の土器類も，土師器供膳具と同様の土層から出土する傾向があるが，これらは前述のように量も少なく，破片となっているものがほとんどである。

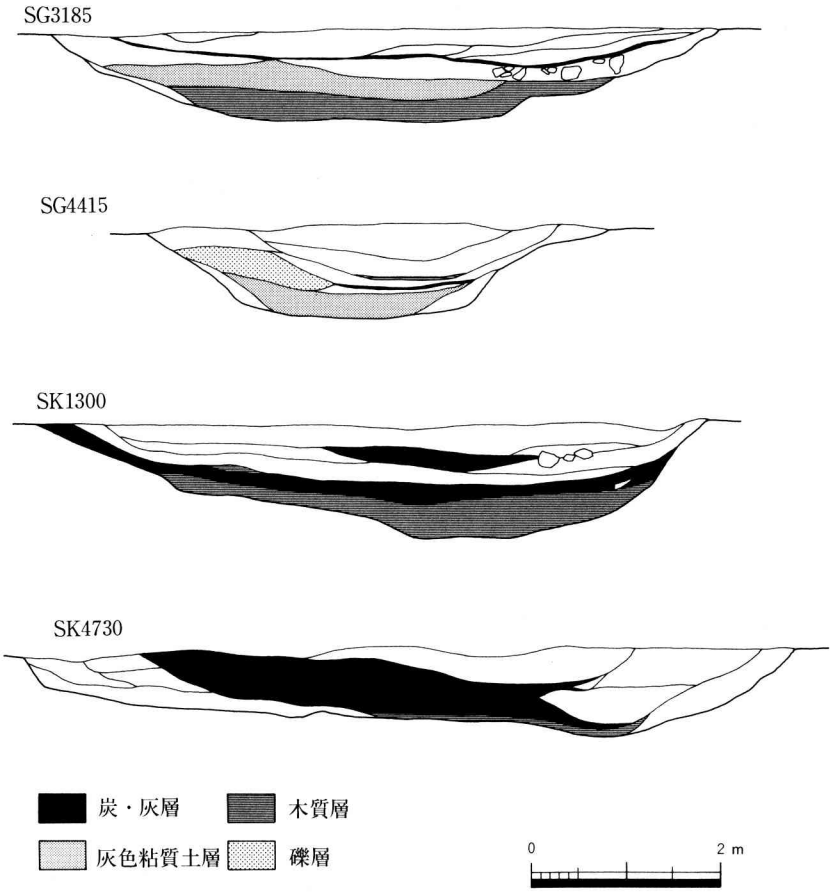


図4　遺構の堆積状況

このような堆積状況からは，次のような遺構の埋没過程が復元できる。まず，遺構が穴として開いていた時期。この時期には，量の多少はあるものの，ほとんどの遺構に水がたまっており，その状態で最下層の粘質土層が形成されたものと考えられる。水のたまった状態が長期間続けば粘土層が厚く堆積することになり，そのような状況が想定できる遺構は，池と呼ばれることになる。ただ，当遺跡の場合は，中世当時から地下水位が高かったことが予想され，意図したかどうかにかかわらず，地面に掘った穴に水がたまることは避けられなかったと思われる。したがって，池と土坑の区別は困難な場合もある。そして，何らかの事情によってこの穴を埋めなければならなくなった場合，重要な課題となるのが，穴を埋め戻した跡の地盤の安定性を保つことだったと考えられる。なぜならば，施設を廃絶して整地するということは，古い施設の存在していた場所を，新たな施設として利用しなおすことを意味しているからである。とくに，草戸千軒のような「都市的」といわれる集落空間では，土地利用の制約は重要な問題ではなかったかと想像される。そのため，まず遺構内の水をある程度排水し，その中に不用になった木製品や木屑，または木の枝葉などを敷き詰める。これらが，木質層を形成することになる。これは軟弱な粘質土を安定させ，その後の作業を容易にすることに効果があったと思われる。次に，この上に炭や灰を敷き詰めることになるが，穴の中で火を焚いた可能性も考えられる。炭や灰は，遺構下部から浸透してくる湿気を排除することに目的があったと思われる。そして，その上を汚れの少ない砂質土，いわゆる真砂土を何層かに分けて入れることによって整地しているのである。もちろん，検出された全ての遺構に対してこのような想定が適用できるわけではないが，大量の土師器食膳具が出土した大規模な遺構の多くに関しては，以上のような一定の手順にしたがって埋め戻されていたことが想定できる。

したがって，集中的に出土する土師器食膳具は，遺構埋め戻し過程の一環として遺構内に入れられたことになる。もしこれが，池などの施設が機能していた時期に断続的に廃棄されたものであれば，最下層の粘質土層中に，粘質土を何枚か挟みながら堆積するのではないだろうか。事実，そのような状況で出土する遺物もあるが，完形品が大量に出土するようなことはない。また，水のたまっていない穴の中に断続的に廃棄されたとしても，破損していない個体がほとんど間層をはさまず堆積する状況は想定しにくい。さらに，土器の型式に時期差が認められないことも，遺構埋め戻しという限られた時間内に収められたものだったことを示唆している。

（5）変遷過程

さて，次は土器そのものの変遷過程から，この問題を検討する。

草戸千軒町遺跡の土師器食膳具の変遷過程に一貫しているのは，寸法規格の小型化と製作手法の簡略化の傾向である。詳細については発掘調査報告で繰り返し説明しているので省略するが，筆者はこれを食器としての機能を低下させていく過程と見なしている。

この変化がとくに明瞭なのは土師器椀である。図5には，代表的な資料によって高台付き椀の口径と容積の変化を示しているが，中世Ⅱ期の遺構面の下に位置する下部砂層から出土した椀（12世紀後半）の口径が14.8cm，容積が380mlであるのに対し，中世Ⅲ期後半のSK1300（14世紀中葉から後半）では口径9.8cm，容積90mlにまで小型化している。つまり，12世紀後半から14世紀後半までの間に，容積では4分の1以下に変化していることになる。ただ，変化が寸法だけにとどまるのならば，これは単なる容器の小型化であり，機能の低下とまでは言えない。しかし，同時に進

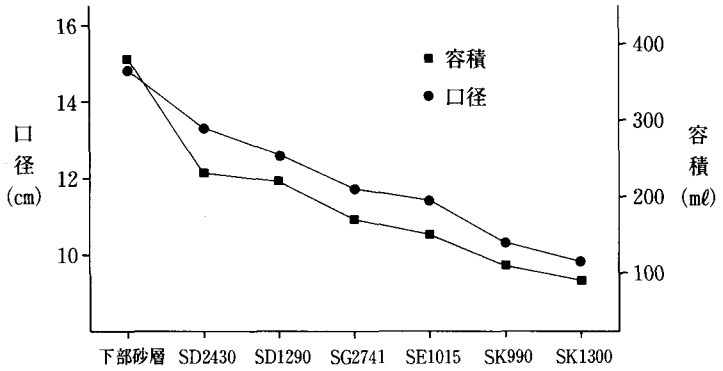


図5　土師器椀の小型化

行した製作手法の簡略化，とくに高台の簡略化は，土師器椀の機能を大きく損ねる方向へと進んでいる。中世Ⅱ期までの高台はある程度の高さがあり，器体の安定を保っているのであるが，中世Ⅲ期になると低く不安定なものとなり，器体を安定させる機能を全く果たさなくなる。内容物を器の中に保持しておくことさえも危うくなっているのである。

ただし，中世Ⅲ期における土師器椀の機能の低下は，消費財としての土師器椀の存在意義が低下したことには結びつかない。なぜならば，出土量は中世Ⅲ期になっても低下することはなく，逆に増加しているからである。先に挙げたSK1300のような大量の土師器椀を出土する遺構は，中世Ⅲ期になって数多く確認できるようになる。つまり，食器としての機能が低下しても，人々は以前にも増して大量の土師器椀を必要としていたのである。

これらのことを考え合わせると，寸法規格の小型化と製作手法の簡略化傾向は，土器の量産を進める過程で現れてきた現象だと考えられるようになる。すなわち，土器の寸法を小型化し，成形・調整の手間を省くことによって一個体当たりの製作にかかる時間を短縮し，製品の量産に対応していった。結果として，製品の機能は次第に低下することになった。このように解釈できるのである。このことは同時に，土師器食膳具に求められていたものが食器としての機能ではなく，数量の多さであったことを示している。したがって，土器の形態変化の面からも，土師器供膳具には日常的な食器とは異なった機能・用途があったと考えざるを得ない。

ところで，土器の食膳具の寸法が小型化する傾向は，草戸千軒町遺跡だけで確認できる現象ではなく，瓦器椀をはじめとする多くの中世土器に共通する変化である。そして，その原因を木製椀・漆器椀などの普及に求める見解がある〔稲垣1968〕。しかし，草戸千軒町遺跡では土器椀の小型化に伴って漆器椀の出土量が増加することはなく，こうした想定は成立しない。また，食事の量や回数の変化に原因を求める意見もあるが〔渋谷1991〕，食事習慣そのものに変化があったとすれば，それは漆器などにも当然反映されると考えられる。ところが，漆器の食膳具には寸法の小型化傾向は確認できない。したがって，小型化という傾向は土器に特有の変化だったと考えるのが妥当である。

3 土師器食膳具の特質

これまでの検討によって，土師器食膳具は遺構の埋め戻しという限定された期間内に一括して埋められたもので，それらは日常的な食事の容器としては使われていないことが明らかになった。そこで問題となるのは，何のために遺構内に大量の土師器を埋めたかである。

土師器食膳具の大量廃棄を日常的な食事以外に結びつける考え方は，藤原良章氏の論考〔藤原1988〕をきっかけに多く見られるようになった。藤原氏は，「かわらけ」が非日常的とも言えるさまざまな特質を有していたことを指摘したが，それらの論点に対して，考古学研究者の側からは十分な検討が加えられていないように思われる。それにもかかわらず，近年は「饗宴」の器としての側面が強調される傾向が見られる。

たしかに，「饗宴」の器としての側面を否定することはできない。たとえば，東京大学構内遺跡における藤本強氏らの分析〔東大遺跡調査室1990〕〔藤本1990〕〔萩尾1992〕には妥当性があり，これを将軍の「御成」に関連づけた研究は十分に評価できる。ただし，これによって中世の土師器食膳具の大量廃棄事例のすべてが，「饗宴」に結びつけられるようになったとは思われない。資料それぞれの考古学的な分析を経た上で，解釈されるべき問題だろう。

ここに述べてきたような草戸千軒町遺跡での事例に関して言えば，「饗宴」で使われた器が，なぜ池などの埋め戻し過程の土層中に埋められたのかが説明できない。使用後の器が池などに一括廃棄されたのは良いとしても，それが出土するのは池の底ではなく，埋め戻し過程の土層中から出土する例が圧倒的に多いからである。井戸の場合も同様で，完形品は井戸の底でなく，埋め戻し途中の土層から出土するのが一般的である。こうした事例は，土師器食膳具の大量投棄の原因が「饗宴」にあったのではなく，むしろ施設の廃絶との関係が密接であったことを示している。

この点で参考になるのは，水野正好氏によって論じられた井戸の埋め戻しに関する呪術的な手順である〔水野1976・1978〕。水野氏は，井戸の廃絶という行為が一定の手順に従って行われたことを示し，その呪術的な背景について論じている。そこでは，井戸内埋土から出土する土器類については触れられていないが，完形に近い状態で一括出土する土師器供膳具が，埋め戻しに関係する手順の一つとして埋められたことは十分に考えられる。同様に，井戸以外の遺構から出土する土器についても，施設廃絶の手順の一環として埋められた可能性が想定できるようになる。つまり，井戸以外の集落内の施設を廃絶する際にも，井戸と同様にさまざまな手順が必要とされていたと考えられるのである。木質や炭・灰によって遺構下部からの湿気を遮断するのも，そうした手順の一つである。これは施設廃絶の手順の中でも実用的あるいは機能的な側面になるが，その他にも，現在では機能的とは言い難い手順も必要とされていたに違いない。その一つに，ほとんど使っていない土師器食膳具を大量に埋めるという行為を位置づけることができるのである。こうした機能的側面だけでは説明できない手順は，呪術という言葉によって表現されるのであろうが，現在の筆者には呪術の内容にまで言及する用意がない。ここでは，遺構埋め戻しに関連して何らかの儀式が行われ，そこで大量の土師器食膳具が必要とされたと理解しておきたい。

遺構から一括出土した土師器食膳具を，遺構埋め戻しの儀式に関連づけることによって，前述の土器の用途に関する特徴の多くは合理的に説明できるようになる。たとえば，完形品が特定の層位から集中的に出土し，それらにほとんど時期差が認められない点に関しては，儀式のために一度に

大量の土器が用意され，それらが使用後一括して遺構内に埋められたものと説明できる。また，一部の土器に灯明皿としての痕跡が認められることに関しては，これらの土器に火を灯すという行為が，儀式の一環に位置づけられていた可能性が高い。遺構内に充塡された炭・灰とともに，一連の儀式に火が関与していたことを示唆するものである。

遺構の埋め戻しに伴って「饗宴」が催され，そこで土器が使われたという見方も否定することはできない。しかし，先に見たように土師器食膳具には食器としての機能は求められておらず，「饗宴」があったとしても，そこでの食膳具の中心的な役割を果たしていたとは考えがたい。さらに，SK1300のような2万点を超える土器の出土も，実用的な食器として使われたと見るにはあまりにも多い量である。むしろ，儀式の道具としての象徴的な役割を与えられていたと考えるべきだろう。

もちろん，遺構埋め戻しの儀式以外の場で，これらの土器が使われたことを全く否定するものではない。先に示したように，内面に漆の付着する例などによって，それ以外の場で使われたことは明らかである。また，補助的な食器として使われた可能性も残されている。しかし，それが本来の機能・用途だったと考えられないのである。

ところで，土師器食膳具を遺構埋め戻しの儀式に使われたものと考えると，そのような特質がいつごろ確立してくるのかが問題となってくる。ここで論じたのは草戸千軒町遺跡の資料であるが，同様の特徴をもつ土師器食膳具は，備前・備中・備後の瀬戸内海沿岸部を中心に分布しており，近年は「吉備系土師器椀」などと呼ばれている〔百瀬・橋本1988〕。現在までに明らかになっている資料からは，その成立は11世紀後半にまで遡ることができるが，寸法の小型化と製作手法の簡略化は成立直後の段階から始まっている〔山本1993〕。また，井戸・土坑・溝などから完形品が一括して出土する例も多い。つまり，草戸千軒町遺跡の場合と同様の特質を有していた可能性は十分に考えられる。したがって，11世紀後半の成立直後の段階から，これらの土器は儀式の器としての役割を果たしていた可能性も考えられるだろう。

ただ，11世紀後半から12世紀代の土師器椀は食器の機能を果たせるだけの形態を保っていることから，当初は食器として成立した土器が，ある段階から性格を変化させたという考え方も当然成り立つ〔山本1993ほか〕。しかし，11世紀後半の成立から14世紀末の消滅まで，この土器の変遷には寸法の小型化，製作手法の簡略化という点で一貫性がある。もし途中で，機能という重大な属性に変化が生じていたならば，それは土器の変遷過程の上にもはっきりと現れるのではないかと思われる。むしろ，当初から儀式の器としての性格を備えており，その目的に合致する方向へ一貫して変化してきたと解釈した方が，土器変化の連続性を合理的に説明できるのではなかろうか。製品の機能が形態に反映されているのは確かであるが，形態と機能とが常に均衡を保っていたとは考えられない。形態と機能との間に存在する不均衡こそが，新しい形態を生み出す原動力になっていたはずである。食器の形態をもちながらも，日常的な食器としては利用されなかったという不均衡が，土師器食膳具の形態変化の背景にあったと考えたい。

このように，土師器食膳具の機能を日常的な食器から切り離すと，14世紀末から15世紀初頭にかけてに見られる椀形態の消滅を，食習慣の変化に結びつける必要もなくなる。たとえば，土師器食膳具を大量に消費する儀式の内容自体に，何らかの変化が生じていたと考えることも可能である。表3で示したように，椀形態が消滅した中世Ⅳ期以降は，土師器食膳具全体の出土比率にも変化が

起こることから，儀式の在り方にも変化があったに違いない。しかし，その具体的内容については明らかにできておらず，今後の課題としたい。

おわりに

ここでは，草戸千軒町遺跡出土の食器類の概要を紹介するとともに，土師器食膳具の特質について検討した。そして，土師器食膳具が他の土器類とは異なった扱いを受けていること，遺構埋め戻しの儀式に伴って遺構内に一括廃棄されたと考えられることなどを論じてきた。儀式のために大量に調達され，その後遺構に埋められるという特質は，この集落で使われた土器類の中でも特異な位置を占めていたと言えるだろう。遺跡の発掘調査では最も普遍的に出土しながらも，必ずしも普遍的とは言い難い消費過程をたどっていたことになる。そこには，出土遺物の構成比率は日常生活の場での使用比率がそのまま反映するものではないということも示されている。考古資料の分析に際しては，遺構・遺物がどのような過程を経て形成されているのかを常に検討する態度が必要だということを，改めて認識することになった。

また，施設を廃絶して遺構を埋め戻すという行為は，その土地を新たな目的で利用することを意味しており，そこには集落の変遷過程と同時に，集落内の空間利用の在り方が反映されているはずである。したがって，土師器食膳具をはじめとする遺構内の遺物の廃棄に至る過程を分析することは，中世集落そのものの特質を解明する上でも，きわめて重要な研究課題となる。幸いにも，草戸千軒町遺跡は集落の中心部分を継続的に調査することができたため，集落の成立から終末までのプロセスを通じて，この問題を検討することが可能である。今後は，そうした遺跡の特徴を生かした研究を進めることによって，課題の解決を図っていきたい。

（広島県立歴史博物館，国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

註

（1）――土器類の名称は全体の編集方針に沿ったものを使用しているため，発掘調査報告とは異なった名称となっているものもある。たとえばここでの「土師器」は，発掘調査報告での「土師質土器」に相当する。

（2）――輸入陶磁器の出土状況については，〔鈴木1995a〕に概略をまとめた。

（3）――須恵器系の中世陶器窯である亀山窯の系譜を引くと考えられる瓦質焼成の製品群を，亀山系瓦質土器と呼んでいる。成形・調整手法に，亀山窯の特徴が良く表れている。〔伊藤晃1987〕参照。

（4）――井戸に利用された桶の中には，底板の痕跡が確認できないものもあり，これらは当初から井戸側として製作されたものと考えられる。

（5）――井戸材として出土した刳り抜き木材のほとんどに底板の痕跡が確認できることから，刳桶の転用品だと判断できる。

（6）――常滑の出土状況は，〔佐藤・鈴木1992〕〔鈴木1995c〕にまとめている。

引用・参考文献

伊藤　晃　1987　「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館
稲垣晋也　1968　「瓦器椀の成立と展開―奈良時代黒色土器工人から室町時代火鉢座への系譜―」『日本歴史考古学論叢２』吉川弘文館
愛媛県埋蔵文化財調査センター　1983　「瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ（見近島城跡）」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
木戸雅寿　1982　「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒』No. 112，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
佐藤昭嗣・鈴木康之　1992　「草戸千軒町遺跡およびその周辺遺跡にみる常滑焼」『知多半島の歴史と現在』No. 4，校倉書房

渋谷高秀　1991　「瓦質土器出現期の地域性—南北朝期における和泉・紀伊の土器様相—」『考古学研究』No. 151，考古学研究会
下津間康夫　1991　「草戸千軒町遺跡出土漆器類観察ノート—椀・皿類の編年試案—」『草戸千軒』No. 216，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
鈴木康之　1989a　「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)」『草戸千軒』No. 197，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
鈴木康之　1989b　「土師質土器の用途に関する研究ノート(2)」『草戸千軒』No. 198，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
鈴木康之　1993　「土師質土器の規格性について考える」『草戸千軒』No. 221，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
鈴木康之　1995a　「草戸千軒町遺跡における貿易陶磁の変遷—特に廃棄量の変化をめぐって—」『青山考古』第12号，青山考古学会
鈴木康之　1995b　「草戸千軒町遺跡出土の桶・樽について」『草戸千軒』No. 229，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
鈴木康之　1995c　「草戸千軒町遺跡出土の常滑焼」『月刊考古学ジャーナル』No. 396
東京大学遺跡調査室　1990　『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3（東京大学本郷構内の遺跡　医学部付属病院地点）』東京大学医学部付属病院
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1993　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1994　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1995a　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1995b　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1996　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅴ』広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1979　『尾道—市街地発掘調査概要—』尾道市教育委員会
広島県立歴史博物館　1993　『広島県立歴史博物館総合研究報告1（安芸国沼田荘沼田市の調査）』広島県立歴史博物館
萩尾昌枝　1992　「江戸時代初期の宴会の食器類—東京大学医学部付属病院中央診療棟建設予定地点「池」出土の木製品—」『江戸の食文化』吉川弘文館
藤本　強　1990　『埋もれた江戸—東大の地下の大名屋敷—』平凡社
藤原良章　1988　「中世の食器・考—〈からわけ〉ノート—」『列島の文化史』5，日本エディタースクール出版部
水野正好　1976　「竹筒をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒』No. 36，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
水野正好　1978　「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」『草戸千軒』No. 58，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
百瀬正恒・橋本久和　1988　「中世平安京の土器様相と各地への展開」『月刊考古学ジャーナル』No. 299
山本悦世　1993　「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊（鹿田遺跡3）』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター